

## 【厚生労働大臣賞】

後藤 順 様

今も耳底に残る、カラカラカラと足踏みミシンの歯車が回る音。子供の僕の視線先には、中古ミシンを踏む母の背中があった。「父さんの給料だけでは、人並みの生活ができない。子供だけにはひもじい思いをさせたくはない」。母はそんな独り言を常々言っていた。負けず嫌いの母は、そのために内職を始めたのだ。

駅前の間屋から持ち込まれる、裁断された既製服を縫う仕事だ。部分縫いの賃仕事。十銭単位の工賃に、どれほど数を稼げるかで決まる。僕が寝ている最中でも、ミシンの音が響いた。朝早くからもそうだ。母は食事の用意や洗濯などの家事をこなし、その間に内職もする。子供の僕は、母はいつ眠るのだろうか、不安な思いをしたものだ。

父の給料日。母は父からそれを受け取るとすぐに、五つの古封筒に分ける。封筒の表には、「電気・ガス代」、「水道代」、「八百屋代」、「年金代」、「その他」と書かれてあった。その月に必ず払わねばならないと困るものばかりだ。その一つも未払いになれば、生活に支障が生じる。父の給料プラス母の内職代が、それらに消えた。その他に少しでも入れば、貯蓄に回された。

そんな生活の中で、子供の僕には解らないことが一つあった。電気・ガス・水道代が未払いになれば供給が止められる。八百屋の支払いを遅らせれば、つけが効かず現金払いとなり、自転車操業の我が家では困ってしまう。そんな中で、年金の支払いを止めれば「その他」の封筒が増えるではないか。年金など今の直接生活に響くものではない。そんな僕の疑問に母は答えてくれた。

母は、年金を童話「アリとキリギリス」に例えた。こつこつ支払うことで、働けなくなった老後に支給されるという将来への保障。それも政府が保険者になるということで、絶対に未払いなどおきない。生命保険のように掛け捨てではないことなど、母は年金を受け取るまで働くとの意欲を見せた。「お前に生活の面倒をかけたくないからね」。その言葉に、僕は老いる運命を感じた。

母は六十歳まで内職を続けた。年金の決定通知が来た日、母の背中から、ようやく重荷が下りたのが分かった。もう、ミシン針は老眼鏡をかけない

と見えない。一度、糸が切れたら通すのに拡大鏡が必要な状態だった。そんな母にも、内職の内職らしき注文があったが、年金支給が始まるとそれを断った。「生涯現役と働く人もいるけど、年金をもらえば、それを使うのが仕事さ」と、僕に元気な姿を見せてくれた。

生活費の中心は僕が担ったが、母は自分の生活費だと言って、年金の一部を僕に渡してくれた。どれほど母に支給されているのか僕は知らない。これまで母の内職代で引け目も感じることなく学校もいけたし、何不自由なく生きて来られた。その意味からすれば、母の年金の全額をすべて自分の好きなように使ってほしかった。「貧乏性だからね。使い方を知らないんだよ」。そんな母の微笑みが眼に焼きつく。

「良かったよ。給料や内職代を毎月封筒に小分けしたのが。今では、年金をそうしているんだ」。年金支給日に、銀行から下ろしたお金を母は楽しそうに封筒に分ける。「孫のこづかい代」、「旅行積立代」、「生活費助成代」、「老人クラブ会費」、「その他」と。その中で一番入るのはその他だ。とても裕福とは言えない年金だが、母にとっては、一生懸命働いた「御褒美」だ。自分が支払った以上の支給額に、ときに戸惑いの声をあげる。

「私はこんなに貰っていいのかな。孫の世代は大丈夫なのか心配するよ」。確かに母の気持ちは、今の若者世代の年金への不信感に近い。年金は国民共通の「互いに支え合う」精神が根底にあるのだが、少子高齢化の現実問題、年金制度が今後どのようなようになるのか不安が過る。支給額の減額や保険料の増額は避けて通れないだろう。

だが、保険料の未納は、国民の義務としていけない。僕は自分の子供たちに口を酸っぱくして「義務」だけは果たせと忠告している。確かに、両親の生きた時代と、僕たちの時代、そして子供たちの時代から見た、将来は大きく違う。年金が五年後、十年後にどのような形になるのか判らないが、年金を基本とした老後の生活は、どの世代にもあると思う。

五十年以上前、母が「年金代」とした封筒を忘れない。あれが確実にあったからこそ、母の老後を充実させた。自助努力にも限界はあるだろうが、国民のひとりとして、年金制度を破綻させてはいけない。超高齢化と呼ばれても、この最低保障を維持していかななくては、誰が老後を守ってくれるのだろうか。母は僕に教えてくれた。

## 【日本年金機構理事長賞】

三井 滉大 様

僕の父は僕が生まれてまもなく、精神障害を発症した。発症当初は症状が安定していなく、3ヶ月単位で入退院を繰り返し、仕事も休職せざるを得ない状況が、何年も続いたことを母から聞いた。一家の大黒柱である父が病気なり、物心がつくまで知らなかったが、父が仕事に復帰するまでの間、収入がゼロという現実の中、家計は火の車だったことを知った。母も家計を助けるために、僕を保育園に預け働きに出た。父の病気の急性期の状態は2年程続き、精神障害には波がある為、その後も数か月の入院をすることが度々あったという。その様な家庭状況のなか、障害年金の制度があることを母が知った。当時の父は判断能力の低下により、何かを決断することなど全く出来ず、障害年金の申請も全て母が行ったそうである。申請にあたり、家族の申立て書、医師の診断書、病院も何件か変わっていた為、発症当初の受診状況や、それぞれの病院での情報も、さかのぼって収集したことが、とても大変だったと当時を振り返って母が話してくれた。僕は小さすぎて何も知らなかったが、そんな中でもここまで育ててくれたことに感謝しなくてはいけないと思った。

障害年金の申請がこんなにも大変なことだとは知らなかったが、まず精神障害は目に見えての障害ではないことから、医師が数値や検査の結果で障害を証明することが出来ないことも難しさの一つではないかと思う。その次に、先日、年金機構の方のお話を聞いて、世代を超えてすべての方を国民年金が支えていることを知り、大切な国民の財源を受給するためには、当事者のすべての情報が必要になるのは当たり前だと思った。

母が申請したおかげで、父は障害年金を受給することができ、2年間障害年金のおかげで、僕の家族は本当に助かっていたのだ。

少子高齢化社会の現代で、老齢年金も高齢者にとって健康で文化的な生活を送るための大切な支えとなっている。公的年金は世代と世代の支え合いである。公的年金を支える現役世代が減少していることを考えると、20歳になったら公的年金制度に加入し、保険料をしっかりと納める義務を必ず守らなくてはならないと実感した。

僕の父が障害年金を受給したのは2年間のみである。その後は社会復帰し、障害と向き合いながら僕の家族を支え続けてくれている。そんな父に

今年の春、新たに難病が見つかった。完治することがない病気である。治療をするためには、高額の医療費がかかり、継続的な治療をしなければ、かなり症状に苦しむことになる。そのために今、母は再び障害年金の申請手続きを始めたところである。

僕は今まで公的年金制度について何も考えたこともなく、何も知らなかった。年金制度が老齢年金のみではなく、自分の家族の支えとなっていたことを知り、国民の一人として年金制度の大切さを再認識することが出来た。

僕は父が感じている生きにくさが、少しでも無くなる社会にしていくのは、僕たち世代であると感じた。

人は必ず一人では生きて行けないし、誰かによって支えられ、また支えていることを忘れてはいけないと思った。

自分ができること…まずは20歳になったら必ず公的年金に加入することから始めようと思う。

## 【優 秀 賞】

宇佐美 直恵 様

大人になったと実感する瞬間は人それぞれ、様々な出来事があるだろう。私が成人したと実感した瞬間、それは自分で稼いだお金で 20 歳の誕生月に年金を支払った時だった。

大学 2 年生になると周囲は「年金手帳を受け取った」、という人がちらほら出始めた。

大半の友人たちは「学生納付特例制度」を申請し、納付を見送った。しかし私はあえてその申請をしなかった。

私は成人する前、自分自身にこう問いかけた。

「法的に成人し、投票権という『権利』も持つようになる。一人前として認められる。幼い頃は予防接種や義務教育など、いろいろなものを社会に与えてもらった。でも成人した時、私は社会に対していったい何の義務を果たしているのだろうか？」

その問いに、何も答えられなかった。

周囲を見ると、社会人としてすでに働いている友人達はすでに税金も年金もおさめ、自立した「大人」になっていた。

「大人」として自分ができる事。社会に対して果たせる義務・役割。すぐに出来そうな事として私が思いついたのは、「自分で働いたお金で年金を納める」という事だった。

年金の納付が始まる前に、私はアルバイトを始めた。面接で「自分で働いたお金で年金を納めたいんです」と伝えると、周囲の方々が温かく応援して、助けてくれた。

みんなに助けられて、少しずつお金をためた。

誕生月が近づいたある日、いよいよ私の手元に年金事務所から納付書と手帳が届いた。

意気込んで封筒を開けたものの、書類の内容がさっぱりわからない。とにかくこのままでは駄目だと思い、届いた封筒を持って近くの年金事務所へ出向いた。

初めて入った年金事務所、何をどう言えばいいのかもわからない。やっと

出た言葉は「あの、これが届いたんですが」という大人にあるまじき何とも情けない言葉だけ。担当の職員の方は慣れた様子で「ああ、学生さんだから払わないようにしたいのね」と私に声をかけてくれた。

が、とっさに「いえ、払いたいんです。そのために前もって自分で働いてお金を貯めたんです！」と自分でも驚くぐらいハッキリ、大きな声が出た。何か自分が中ではじけたような、そんな気がした。

すると職員の方が目を見開き、嬉しそうに私に送られてきた書類について教えて下さった。

いろいろ教えていただき、その足で郵便局に年金を納付しに行った。当時の私にとっては大金、それも自分で頑張って働いたお金だ。窓口でお金を渡し、納付が完了した時、「ああ、これで大人として義務を果たせるようになった。」と心から実感した。

この日の事は10年以上たった今も鮮明に覚えている。

毎年私は誕生月にねんきん定期便を開き、保険料を納付した記録を確認する。その時に学生時代の納付履歴を見ると、一人前になりたくて背伸びしていた昔の自分の姿が目には浮かび、無性に懐かしい気持になる。

今私は会社の人事担当として企業年金に携わっている。

ここでもまた上司、先輩達、受給権者の方々をはじめ、多くの方に助けられている。

20歳の時、年金が私を大人として成長させてくれた。

そしてこれからもきっと、年金が私を成長させてくれるだろう。

## 【優 秀 賞】

緒方 陽子 様

「幸福とは1日の仕事が終わりに、2人で楽しく話しながら食事をする事です。人生は楽しいと言っていれば、それで楽しくなるのです。幸福とは1日1日の暮らしに感謝しながら暮らすことです。」

我が家の玄関に額に入れて掛けてある、この言葉は約20数年前に義母がくれた手紙の一文です。義母は書くことが好きな人で、60代になってからワープロを学び、ワープロで打った手紙をくれるようになった。この言葉は人生の教訓にと切り抜いて額に入れ、何処に引っ越しても何時でも見られる場所に掛けて来た。様々な事がある度に、綺麗で優しかった義母を思いだし、この言葉を読み「まだ、頑張らなくては。」と自分を励まして来た。

義母は若い頃から、休まずに働いた人だ。「私は65歳まで働いたのよ。」と言うのが自慢だった。それは、夫婦で厚生年金を持つ事に繋がり、如何に老後に年金が大切かを言い聞かせる為だった。「厚生年金を持っていると、老後は何とか暮らせるようになるのよ。」と、口癖のように言っていた。義父は若い時に自営業を営み、その後、会社員になった。厚生年金を掛けていたが、何度か会社を変わった事で、いざ年金の手続きをしようとした時に途中の会社が抜けているのに気が付き、手を尽くし、25年以上の加入期間が繋がり厚生年金を夫婦でも貰えるようになった。「年金があるので子供達に援助を求めなくて生活が出来る事が有り難い。」と言っていた。そして、息子達には勿論、嫁達にも働く事を何時もすすめていた。私も若い時から、義母と同じように65歳までは勤めようと、思っていた。ありがたい事にこの春に退職をする67歳まで勤められた。若い頃に専業主婦の時期があり、娘が小学1年生になって35歳から会社勤めをしたので掛け年数が少し短い分、年金額は低い、其れでも年金を持っている事の有りがたさを実感している。「まさしく年金は老後の命綱だ。」と思う。

知人の中には若い時には何店もチェーン店を持つ程に豊かだった方がいる。若くお金のある時には、「年金を掛けなくても十分なゆとりは或る。」と何の不安も無かったらしい。「自営業は定年が無いので幾つになっても働く事が出来て収入がある。」と思っていた。それが、時代の変化で次々に店を閉める事になった。収入は激減して、60代の時には、最後の店を

たたみ夫婦で勤めざるを得なくなったらしい。その年齢になると、パート職しかなく身体に辛い仕事に就かざるを得なかったと聞いた。今は70代だが、残念なことに夫婦とも無年金で、体に鞭打って働かざるを得ないと言う。救済処置にも現在の生活が苦しければ手が出ないらしい。このままいけば保護の申請をせざるを得ないと肩を落とされる。似たような方は多いと思う。

若い時は何時までも仕事ができる気がするが、60歳の声を聞くと、身体の彼方此方にガタがくる。気持ちはあっても身体がついて行かない。65歳、70歳、身体の不調は増すばかりだ。機嫌を取りながら無理をせずにボツボツと暮らすことになる。

その時に年金があると無いでは大差が出る。先ずは若い時から正しく年金の手続きや保険料の納付を行うことが老後の為に、何より大切だ。

親が年金を掛けていれば、両親にもしものことがあった時には遺族年金などで救われる。

自身は勿論だが、学生を持つ親御さんにも子供への何よりの贈り物だと、本人が掛けられるようになるまで負担をしてあげて欲しい。

若い時の数千円は大した額では無いかもしれないが、老後には貴重なお金だ。

身体も体力も気力も経済力も弱る老後の為に若い時から、休まずに年金を掛け続ける事が大切だと伝えたい。

年金は老後の命綱だから。

一生懸命に働いて年金を掛け、年を経た時に、穏やかに暮らせるように準備が必要だと痛切に思っている。

## 【優 秀 賞】

梶 恭子 様

父方の祖父が亡くなったのは、去年の7月の下旬だった。天気予報では、日々最高気温が更新され、気報予報士が熱中症への注意を呼びかけていた。祖父は、ガソリンスタンドの経営をしながら、店番を祖母に頼み、近くの田で稲を育てる兼業農家だった。

セルフ式の安い価格のガソリンスタンドが増え、同業者は次々と廃業していく中で、お客は既に常連や近所の人のみという状態だった。しかし、町内では1軒だけとなったガソリンスタンドを「子供は自立したし、自分たちは年金で生活できるから。」と言って、灯油の配達など小さな注文を受けながら採算度外視で店を続けていた。

そのような中で、祖母から、午前中に田の様子を見に行った祖父が午後になっても帰ってこないという連絡を受けた。心配して見に行った父が、倒れて亡くなっている祖父を発見した。

あわただしく葬儀が行われ、長年続けてきたガソリンスタンドを閉めることになった。2人での生活が1人になったことにより祖母の年金収入が半分になるのかと思ったが、遺族年金制度により多めに受け取れることになった。

少し考えてみると、二人暮らしが一人になったからといっても、光熱費が半額には絶対ならないし、住居の固定資産税は、変わらない。食料品は、少量で購入するときは割高である。このような保障制度は個人の困難に合わせて対応できるようにつくられているのだと実感した。

また、仕事をしている母は時折、あと3年働いたら厚生年金をもらえろと言っている。それまでは仕事を辞めずに働きたい。私はまだ学生なので仕事をした経験はないけれど、辛い仕事も、老後の生活の安心のために頑張るといふ事だと思う。厚生年金の掛け金は、雇用主である会社と母が折半して支払っているのだから、被雇用者には非常に有利な制度だ。定期預金でさえ、0.0何%しか金利がつかないにも関わらず、今受給している方は、早逝しなければ、掛けた金額より多く受給できており、それが生涯続く。

少子化により将来の現役世代の人口の減少が加速するなかで、掛けた金額だけ受け取る事ができないから損だと言う人もいるが、私は賛同できない。そもそも、この制度に損か得かという考え方はそぐわないからだ。

年金には、障害年金もある。事故や病気でもし障害を持つようになっても、金銭面では生活の心配をせず、暮らしていける。日本国憲法が保障する「健康で文化的な最低限度の生活」は、生活保護制度で対応しているが、公的年金制度がカバーしている部分も大きい。

年金制度は、同じ時代を生きる国民が、安心して生きることができる公助かつ共助の制度であると思う。そして、制度はその時代に合致したものに常に進化し続けている。しかし、国民全員が制度を信用して加入しないとうまく機能しない。だから、私自身 20 歳になったら、保険料を納めていきたいと思う。今の世代の受給者を支えることは、制度を存続させ、自分の将来の安心を得ることに繋がるのである。

## 【優 秀 賞】

田中 千恵 様

若い時には何も考えていなかった年金。その重要さに気付かされたのは親の介護がキッカケだった。私が 22 歳になったばかりの頃、63 歳の父が倒れた。脳血栓であった。半身不随になりつつも意識ははっきりしており、自営だった事もあり仕事の段取りなど寝たきりではあったがベッドから指示を出していた。未だ年齢的に若かったので、手術して回復するものだと思っていたが結局、場所が悪くて手術も叶わずその後 11 年間で寝たきりの状態で過ごした。一家の大黒柱の不在で収入は激減した。先行きの見えない中で入院費など多くの負担を強いられたが、幸いにも年金を受取れる年齢に達していた事が唯一の救いであったと母が話してくれた。最終的には当時まだ数少なかった特別養護老人ホームに入所し最期を迎えた。父が受取り自分の老後のために楽しみであったであろう年金は結局、父の入院などに宛がわれてしまった事が今、振り返った時に申し訳ない思いに駆られる。

父を見送った時の私は 3 歳の娘を持つシングルマザーとしてパートに勤しんでいた。

お金は無かったが人には恵まれていたので、パート先でも良くして頂いた。そんな時、娘が小学校に上がる頃、パート仲間に「厚生年金と社会保険完備の会社に勤めた方が良いよ。この先の事を考えたらパートではなく正社員で働かないと、お金がかかるから大変よ」と促され一念発起して今の会社にお世話になり 25 年が経った。還暦を過ぎた今でも働かせて頂いている。本当に有難い事だと感謝の思いで一杯である。

母も私が幼い頃から仕事をしていて 70 歳過ぎまで働き続けた。リタイアしたあと、私達と一緒に暮らし、扶養家族に出来ない程の年金を受取り、家事をこなし孫の面倒も見てくれた。一緒にいてくれて有難う。

母には感謝の一言である。一緒に暮らしている中、喧嘩をしたり、揉めたりもしたが、傍らにいてくれた事は有難かった。母は年金を私たち母娘の為にも惜しまず偶数月には家に入れてくれた。母の為だけに使って欲しかったが現実には厳しく、年金に依って支えられていたと今、振り返っても感謝の思いである。

しかし、そんな母も老いには勝てず認知症になり、最期の 3 年半は病院で

の生活となった。

母の入院費もまた、父と同様、年金に助けられた。要介護の申請は通ったものの毎月支払う額は、私一人の収入ではどうにもならない。母には申し訳ないと思いながらも年金で一部補填させて貰った。

ここでも、年金に感謝の思いが募る。有難いと本当に思った。

そして、92歳まで頑張ってくれた母を見送る頃には、自分の還暦が少し見え始めていた。

父を介護し平成元年に見送り、母と同居し、母に助けられ楽しく暮らし、母を介護し平成22年に見送り、私の娘としての役割は終わったと実感した。そして平成28年、自分が還暦を迎えた。還暦を機に年金事務所に相談に伺い、申請書を提出した。年金事務所の方が本当に優しく接して下さり懇切丁寧に教えて頂きながら、勤務先の協力もあり、何とか全ての書類を揃え申請が終了。毎月のお給料の他に、年金をいただける事に今は感謝の思いで一杯です。18歳から働いていない時期がない程、仕事と介護と子育てだけで過ごして来た人生だったが、介護・子育ての全てから開放され、60歳になってやっと、自分だけの時間を過ごせる様になった。友人と過ごしたり、昔の仲間と会ったりして、充実した日々をおくる事が出来る様になった。これからは、娘の幸せを祈りつつ、母が私にしてくれた数々の優しさを今度は娘に少しでも、お裾分けして行かれる老後を過ごして行きたいと思います。

年金…若気の至りで昔は自分には無縁のモノだと思っていましたが、年齢を重ねるにつれ、その重要さが身に沁みています。